

出エジプト記20章 「十戒」

1A 神の語りかけ 1-17

1B エジプトから贖われた民 1-2

2B 十の戒め 3-17

1C 神への敬い 3-11

2C 人への敬い 12-17

2A 人々の応答 18-25

1B 神への畏れ 18-21

2B 主への祭壇 22-25

本文

出エジプト記 20 章に入ります。私たちは、シナイ山の麓に来て宿営している、イスラエルの民の姿を前回、見ました。ここから私たちは、聖なる神が天から降りて来られて、その方に近づき、その方と交わるという、世におけるキリスト者の歩みについて見てきました。19 章からは、聖めの中に生きるという、世におけるキリスト者のもう一つの大きな営みを見て行きます。

そこで、主がお与えになったのは、十戒です。十というのは、聖書では「試す」という意味合いがあり、その中に生きているかどうかによって、神との関わりが試されているという意味合いがあるでしょう。ロマ 7 章 12 節に、「ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。」とあります。十戒は、私たちが神に近づくために必要な方法ではなく、第一に、神ご自身の聖さ、正しさ、神の良さをそれらの戒めを見ることによって知ることができます。それから第二に、聖なる神、正しい神を知ることによって、自分にはそれらの聖さ、正しさ、良さが無いことを知り、罪の自覚が聖霊によって与えられる、ということです。最終的に、キリストがその罪のために死んでくださったというところにまで導いてくれます。

1A 神の語りかけ 1-17

1B エジプトから贖われた民 1-2

1 それから神は次のすべてのことばを告げられた。2 「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】である。

主はご自分を、「あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、【主】」として現しておられます。これまで私たちは、主がイスラエルの民をエジプトから贖われ、奴隷であったかれらを解放してくださった神、そして荒野の旅を優しく導いてくださった方であることを見ました。その慈しみがあってこそその戒めを、これから与えられます。したがって、繰り返しますが、これらの戒め

を守ることによって贖われる、救われるのではなく、むしろ贖われ、救われたからこそ、これらの戒めを守りなさいと言われていました。

私たちは、キリストの流された血潮によって、罪が赦され、罪の奴隷状態から贖い出されました。そして、主がどれほどまで慈しみ深い方なのかを知っています。それを知ったら、この方を畏れ敬い、愛し、従いたいと願うはずです。私たちキリスト者は今、神の戒めが御霊によって、心に植えつけられたことを教えています。エゼキエルが新しい契約について、こう預言しました。「わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟にしたがって歩み、わたしの定めを行うようにする。」

2B 十の戒め 3-17

そして十の戒めが始まりますが、モーセの語り口を、文法から知ることができます。「これこれをしなさい」と命令形で命じているのは、実は三つしかありません。3 節の「ほかの神があってはならない」、8 節の「安息日を覚えなさい」、そして 12 節の「あなたの父と母を敬え」です。それが大まかな流れといってもいいでしょう。初めに、ほかの神々があってはならない、という命令から、次の偶像を造ってはならない、そして御名をみだりに唱えてはならないと続きます。流れがありますね。そして安息日を覚えなさいという戒めがあり、その詳しい根拠を語っておられます。そして父母を敬えは、父母を敬うからこそ、父母が、何が正しいことかを教えるので、他の人々に対する正しいふるまい方も知ることができる、ということができるでしょう。

1C 神への敬い 3-11

では、第一の戒めを見ます。3 あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない。

イスラエルは、子がこれから父から教育と訓練を受けるかのような状態にあります。エジプトで奴隷状態であったところから、贖い出され、そして荒野の旅においてようやく、その贖われた方がどのような方を知る余裕があります。今は、主なる神ご自身を知る必要があります。

けれども、彼らはずっとエジプトに住んでいました。そこには、あらゆるものが神々としてあがめられていました。恩恵をもたらすもの、栄光や力のあるものは、みな神々でありました。しかし、造られたものは造られたものであり、それらが神と呼ばれても神ではありません。そこで主は、エジプトで神々と呼ばれているものに対して、その神々をエジプトのファラオが誇りとして、自分自身も神としてあがめられているので、その高慢を打ち砕くために、十の災いを下されました。その偉大な力の中に、まことの神、天と地を造られた方の栄光が表れていました。その神だけをあがめなさい、他の神々と呼ばれているものを神としてはいけない、ということです。

そもそも「神」というのは、自分がそれなしにはやっていけない頼るべきものであり、自分がそれに時間を費やし、情熱をかけているものであります。ですから、何でも神になり得ます。ダビデが、

詩篇の中で「16:8 私はいつも、主を前にしています。」と言いました。自分の前にはいつも主が
られ、その間に何も入ってはいけません。けれども、主と自分との間に何かが入れば、それがそ
のまま自分にとっての神々となるのです。ちょうどそれは、夫婦の寝床の間に、だれか他の人を連
れて来るようなものです。あってはならないことですね！それで、そのあってはならないことを、今
ここで戒めています。

エジプトのような多神教の信仰においては、神々は自分のしたいことや、やってほしいことを満
たしてくれる存在であります。力や権力を持ちたいなら、カナン人はバアルをあがめていました。
バアルが「主」と呼ばれていました。性欲についても、それに突き動かされる時にバビロンでは、イ
シュタルがいて、エジプトではイシス、そしてカナンではアシュタロテがいました。そして富に突き動
かされているなら、それはマモンと呼ばれます。快樂の神は、ケモシュとも呼ばれます。こうやって、
自分の欲していることをそのまま手に入れることのできる神であり、そこには人格的な関係性があ
りません。私たちは神を父としており、この方に従うという関係の中で生きています。ですから、一
対一の関係であり、神を神とし、ほかの神々があってはならない、ということです。

4 あなたは自分のために偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるもの
でも、地の下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造ってはならない。5 それらを拜んではなら
ない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む
者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者
には、恵みを千代にまで施すからである。

第二の戒めです。第一の戒めでの「神々」をあがめるというのを心の中でのことであるとするなら
ば、第二の戒めはそれを形にして行っていることです。天地を造られた神以外のものを、つま
り被造物を心であがめている時に、それを形にして拜むことを意味します。像や形を造ること自体
を、神は否定しておられるわけではありません。神は 25 章から、契約を箱を作りなさい、幕屋を造り
なさいと命じられました。けれども、それを拜むようなことであれば、頼ったり、仕えたりするならば、
神は造りなさいと命じられたものでも偶像となります。後にヒゼキア王が、モーセの造った青銅の
蛇を人々が拜んでいたのも、それをネフシュタン、つまり「ただの青銅の物」と呼んで、滅ぼすよ
うに命じました。

主はサマリアの女に、「神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなけれ
ばなりません。(ヨハネ 4:24)」と言われました。霊ですから、神は目に見えない方です。けれども、
私たちは目に見えない神と、自分の霊において、真理のみことばをとおして交わることができます。
祈りによって神に語り、みことばを通して神から聞くことができます。けれども人間は、目に見えな
いものよりも、目に見えるものに頼りたくなります。神のご臨在を強く意識できていないときに、神
ご自身ではなく、自分の身の回りのものにより頼みたくなります。それが偶像です。

そこで主は、「あなたの神、【主】であるわたしは、ねたみの神。」と言われます。先に例えましたように、主と私たちの関係は、一対一の関係で、夫婦の関係のようであります。実際に、聖書には神を夫として、その民を妻として喩えています。ですから、他の神々を拝み、仕えることは、靈的に姦淫しているのと同じことになり、神と自分との関係を深く傷つけるのです。神の持つておられる妬みは、そのような真実な愛、契約に基づく愛があるからであり、その情熱に基づいています。イエス様が、最も大切な戒めとして挙げられた、「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なる神を愛する」ということです。二心は、まさに二股をかけているようなもので、退けないといけません。

そして、「わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし」とありますが、これは、子孫が先祖のゆえに呪われるという意味を表していません。他の聖書箇所で、父の罪は父に帰される、という言葉もあります。ここで大事なのは、「わたしを憎む者には」という言葉です。主を憎まず、主に立ち返る者が三世代、四世代に起こされるのであれば、主は憐れみをすぐにも注いでくださいます。けれども主を憎むということ、三代、四代にも受け継がれているのならば、そのまま咎が留まるということの意味しています。ここで大事なのは、主の恵みの大きさと長さです。「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」であります。人が神を憎んでその罪の結果を被っても、悔い改めて主を愛して、その命令を守るならば、千代にまで渡る恵みを施してくださる、つまり、罪の増し加わるところには、恵みが満ちあふれるというロマ 5 章にある言葉のとおりであります。

7 あなたは、あなたの神、【主】の名をみだりに口にしてはならない。【主】は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない。

三つ目の戒めです。一つ目が、心の内面であり、二つ目がそれを形にしたものを戒めましたが、三つ目は主への礼拝が形骸化していることを示しています。心は神から遠く離れて、また偶像を拝んでいる生活をしているのに、主への礼拝は形だけは続けていて、主の名を唱えているのであれば、みだりに唱えているということになります。唱えているのですが、中身がない、虚しいということ、ことです。

名前というのは、聖書では、単なる呼び名だけのものではありません。その人の本質や核になる部分を指しています。私たちは単に、「神をほめたたえる」とも言いますが、「神の御名をほめたたえる」と言いますね、その方の本質においてあがめられるようにということ、ことです。ですから、イエス様が主の祈りで、「御名があがめられますように」と祈りなさいと言われました。そして主は、ご自分の名をモーセに宣言された時に、ヤハウエ、また「わたしはある、というものである」と言われました。その名を呼ぶときは、本当にそこに敬いがある敬いがあるべきであり、そうでなければ神に対して大変失礼なところか、冒瀆になるということ、ことです。私たちは、自分たちの行いによって、それが神の栄光を表していなければ、それで主の御名にいわゆる汚名がきされます。それで、この御

言葉があります。

8 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。10 七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。11 それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。

主なる神のみを神としなさいという敬いを説かれた後で、安息日を覚えなさい、そしてそれを他の曜日とは違う、聖なるものとしなさいと命じられています。これは誰か一部の者や安めばよいというものではなく、すべての物が休まなければいけません。家畜も労働をしてはいけません。

主がなぜここでそんなに強調されているかと言いますと、第一に、ご自分の創造を挙げておられます。六日間で天地を造られ、七日目はすべてを造られたので、そこに留まり、休むのだということです。神のかたちに造られた人間も、同じように六日働いて、創造的なことを行いますが、七日目に休みます。私たちは、どんなことを行っても、一度、それを休止することによって、そこで初めて、全てのことは主が行われていることであり、自分自身ではないのだということを知るようになります。「ロマ 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。」休まなければ、行っている者たちに栄光が行き、神に栄光が帰されません。

神は、このようにご自分の創造を覚えてもらいたいことがあり、またエジプトからの贖いも象徴しています。奴隷であったところから自由にされたというのは、休みがあるということです。休むことができるのは、奴隷ではないことを示しています。安息日の戒めは、このシナイにおける契約のしるしとして、イスラエルの子らに与えられていることを出エジプト 31 章 16-17 節で、主は教えておられます。

新約聖書において、安息日の戒めが大きな問題となっていました。ロマ 14 章を見ると、毎日が主の日だとする人もいれば、特定の日を主の日だとする人たちがいるとして意見が別れていました。それぞれが確信しているところに留まるべきで、互いに批判しては行けないことを話しています。しかし、それでもって安息日の本質的なところがなくなったわけではありません。安息の本質としているところは、イエス様が福音書で語られたように、「人の子が安息日の主です」と言われたように、イエスご自身なのです。この方が、十字架の上で「すべてが完了した」と言われた時に、人が救われるために必要なことはすべて完了し、その完成された神の御業に私たちが留まることこそが、安息を持つことであります。それでコロサイ 2 章 10 節には、「あなたがたは、キリストにあって満たされている(完全)なのです。」とあり、安息日のような戒めは、「2:16 来るべきものの影であって、本体はキリストにあります。」と言っているのです。

キリストのところにきて、そこで休むということをする、これは必ずしなければいけないことです。そして初代教会は、週の初めの日、すなわち日曜日に集まっていたようです。トロアスで、週の初めにパンを裂いていたことが使徒 20 章 7 節にありますし、コリント第一 16 章 2 節にもコリントの教会で、週の初めの日に集まっていたことが記されています。そしてイエス様がよみがえられたのは、週の初めの日の明け方であり、聖霊が弟子たちに降ったのも、五旬節が満ちた時で週の初めの日です。ですから、教会が伝統的に日曜日に礼拝を守っていますが、先に話しましたように曜日が重要なのではなく、集まって主を礼拝することそのものが大事です。例えば、ネパールでは公休日が土曜日です。だから土曜日に礼拝するのは理にかなっていません。イスラム教の国では、教会は金曜日に集まっていることでしょう。

2C 人への敬い 12-17

12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、【主】が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである。

第一の戒めから第四の戒めを見ましたが、それは主なる神をあがめることについてでありました。12 節からの第五の戒めから第十の戒めは、同じ人間との関係、また社会的な関係についての戒めです。主は今、ご自身に対する恐れ敬いについて語られているのですが、被造物の中でそれを代表する存在として立てているのは、父また母です。神ご自身が父と呼ばれています。父母を敬う時に、神に従うとはどういうことなのかを知ることができます。

過越の祭りについての教えを思い出してください、誰が誰に教えていたでしょうか？父が子に、エジプトから父祖が贖い出されたことを教えていますね。そのようにして教えるのは父また母の役目であり、それで子がそれを聞いて育ち、神を畏れるようになります。そしてイエス様は、天におられる方を父をあがめているのであるから、神の国に入るには、この小さな子のようにならなければならないと言われたのは、そのためです。

そして、父と母を敬うことによって、与えられる約束は、「あなたの神、【主】が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするため」とあります。これは、カナンのにイスラエルが入った時に与えられている約束であり、私たちにはそのまま当てはまりません。しかし、それでも命を豊かに保つには、両親を敬うところから始まるという原則は当てはめることができるでしょう。パウロも、子が父からの教育の中で育たないといけないと教えている時に、ここの箇所を引用しています(エペ 6:1-3)。

13 殺してはならない。14 姦淫してはならない。15 盗んではならない。

父母を敬うことを教えた後に、これらの戒めが並んでいますが、箴言を読めば、父母が子にこれ

らのことを教えているのを見ることができます。内容を見ますと、これは一つ一つ共通した真理が
らいます。それは、「他人のものは、神のものである」ということです。殺すことは、人の命を取るこ
とですが、命を与え、取るのは神のみです。殺すのは、神のものを奪い取ること、神の主権を著し
く侵害していることを意味しています。同じように、姦淫することは、「神の与えた性に対する重大
な侵害」ということです。性を与えたのは神であり、性を用いるのは神の定めた結婚によってであ
り、それを越えるのであれば、神の領域に入り込んだこととなります。そして、盗んではならないも
そうですね、人の所有物ですが、本質的には神の所有です。神がその人にその物を下さっている
からです。

「殺す」ということで、気を付けなければいけないのは、これは全ての殺人を意味してはいない
ことです。ヘブル語では、意図的に殺意をもって殺す「殺害」を意味しています。戦争で人を殺すで
あるとか、死刑に定めるのであるとか、必ずしも憎しみや殺意をもって殺しているわけではないもの
は、含まれていません。その証拠に 21 章以降の、裁判官に対する定めには、殺す者には殺され
なければいけないという、死刑が書いてあり、それさえも禁じているのであれば、神の戒めが矛盾
してしまうこととなります。

そしてイエス様は、憎しむだけで人を殺していることになっていること、情欲を抱いただけで、姦
淫の罪を犯していることを語られており、単なる行為以上の心の態度であることを教えておられま
す。

16 あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない。

偽ることについての戒めです。神は真理の神です。偽りの父とは悪魔のことであることを、イエス
様は語られました。そして偽りによって、人々の多くが傷をつきます。中傷であれば、それは火の
ようなものであることを、ヤコブは話しています。「3:6 舌は火です。不義の世界です。舌は私たち
の諸器官の中にあってからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれま
す。」時に、物を盗むことよりも、人に大きな害をもたらすこともあります。

そして聖書では、偽りの生活という意味で使われていることも多くあります。単に本当のことを話
している、話していないということだけでなく、偽りのない、真実な生き方をしているかどうか問わ
れています。

17 あなたの隣人の家を欲してはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべ てあなたの隣人のものを欲してはならない。」

最後の戒めは、「欲してはならない」です。貪ってはならない、ということです。第一の戒めが心か

ら始まっているように、第十の最後の戒めも心の態度で終わっています。貪るということによって、偽りをいうし、物を盗むし、また姦淫もするし、人殺しもします。親にも逆らいます。そして神を神としないということも、神を冒瀆することもあります。安息日にも商売をしようとします。すべての悪の源泉ですね。パウロは、偶像礼拝についてその本質は貪欲であることをこう話しました。「3:5 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」

2A 人々の応答 18-25

このように主の戒めを読んでいの中で、私たちは神を神として見るができるようになり、自分の心のある貪りも明らかにされていくのを感じたのではないのでしょうか？その中で、自分は聖なる神によって、その火によって焼かれてしまうのではないか？という恐れも出てくることでしょう。それは健全な事です。それゆえに、私たちがへりくだり、主に憐れみを請い、主の御名を叫び求めることに導かれていくからです。それは、決して神が恐ろしいからではなく、神に対する健全な畏怖、畏れ多き姿に対する応答なのです。そこで次に、イスラエルの民は畏れを抱いている姿を見ます。

1B 神への畏れ 18-21

18 民はみな、雷鳴、稲妻、角笛の音、煙る山を目の前にしていた。民は見て身震いし、遠く離れて立っていた。19 彼らはモーセに言った。「あなたが私たちに語ってください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお語りになりませんように。さもないと、私たちは死んでしまいます。」20 それでモーセは民に言った。「恐れることはありません。神が来られたのは、あなたがたを試みるためです。これは、あなたがたが罪に陥らないよう、神への恐れがあなたがたに生じるためです。」21 民は遠く離れて立ち、モーセは神がおられる黒雲に近づいて行った。

イスラエルの民は、神から遠ざかりたいと思いました。主ご自身が声を発せられ、イスラエルの民に語られたからです。そして、主が天から降りて来られたこの光景を見ていて、自分たちはこのままでは死んでしまうと思ったからです。仲介者がいなければ、やっていけないと思いました。そうです、モーセは神に召されて、神に選ばれているがゆえに、主に近づく働きをすることができましたが、他の民はそうではありません。モーセは申命記で、自分と同じような預言者が現れるけれども、その人に聞き従いなさいと話しました。

そういった仲介の働きをするような預言者が現れる、と言ったのです。その方はイエス様です。「I テモ 2:5-6 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。これは、定められた時になされた証しです。」そして今は、遠くに離れるのではなく、私たちがキリストの内にいることによって、大胆に父なる神に近づくことができるようになっています。(ヘブル 4 章)

そして、モーセは主に対する恐れが与えられたことはよいことだと話しています。罪を犯さないようにするのは、主に対する健全な畏れ敬いです。ヨセフがかつて、主人ポティファルの妻に言い寄らせた時に、神に罪を犯すことなどできないと言いました。神に罰せられるからという恐れではありません。それでは、自分中心です。神を敬い、神の御名を汚してしまう、神に申し訳ないという、神中心の思いです。

2B 主への祭壇 22-25

このようにしてイスラエルの民が主に対する恐れを抱いた時に、主に対する祭壇について教えられます。これまで、エジプトにおいて神々をあがめていた時、その異教の慣わしとは異なる方法があります。それは、一言でいえば「素朴」です。余計な飾りはいらぬ、ということです。

22 【主】はモーセに言われた。「あなたはイスラエルの子らにこう言わなければならない。あなたがた自身、わたしが天からあなたがたに語ったのを見た。23 あなたがたは、わたしと並べて銀の神々を造ってはならない。また自分のために、金の神々も造ってはならない。

彼らがエジプトで見たのは、金や銀で造られた神々でした。そこに、きらびやかな姿がありますが、主はそのようなものを造ってはならないと言われます。主は栄光に輝く方ではありますが、その栄光を遮るいかなるものも省いてほしいと願われています。

24 あなたは、わたしのために土の祭壇を造りなさい。その上に、あなたの全焼のささげ物と交わりのいけにえとして、羊と牛を献げなさい。わたしが自分の名を覚えられるようにするすべての場所で、わたしはあなたに臨み、あなたを祝福する。

主が命じられる基本的ないけにえは、全焼のいけにえと交わりのいけにえです。全焼は、すべてを献げるものであり、私たちの献身を示しています。そして交わりは、そのまま神との交わりであり、共に楽しみ、結びつき、平和を持つということです。そしてここで大事なものは、「土の祭壇」です。その他のものは要らないのです。なぜなら、そこに目が行ってしまい、栄光が神に向かないからです。私たちは、いかに土の祭壇を保っているか？ということでもあります。イエス・キリストだけに栄光が行くように、礼拝を持っているか？ということです。

そして、主はそのような素朴な祭壇において、必ずご自身が臨んでくださることを命じておられるのです。私たちがきらびやかな教会堂のみで会ってくださると考えたら間違いです。どんなに卑しく見えたとしても、ご臨在をもって祝福してくださいませ。

25 もしあなたが、わたしのために石で祭壇を造るなら、切り石で築いてはならない。それに、のみを当てることで、それを冒すことになるからである。26 あなたはわたしの祭壇に階段で上るように

してはならない。その上で、あなたの裸があらわにならないようにするためである。

土ではなく石で祭壇を築くのであれば、切り石を当てて、それに注目が行くようにしてはいけないということです。そして祭壇を階段で上ると、それは切り石で造られているのであり、そのために祭司の衣の裏側が見えてしまいます。恥ずべき部分が、覆い隠す部分が反射されて見えてしまう、まずもって主ご自身に目えてしまうということから、それが禁じられています。このようにして、神を敬うとは、なるべくその間に立つようなものを取り除く必要があるのだということです。

こうやって礼拝のことを教えられた後に、21-23 章において主は、裁き司たちに対する定めを与えられます。十戒で与えられたことを、具体的な社会生活においてどのように適用されるかについて見て行きます。